



関西学院大学リポジトリ

Kwansei Gakuin University Repository

## 丹治先生を偲ぶ

著者	小山 敏夫
雑誌名	外国語外国文化研究
巻	18
ページ	ix-xiii
発行年	2020-03-31
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10236/00028606">http://hdl.handle.net/10236/00028606</a>

## 丹治先生を偲ぶ

小山敏夫

世に「巨星墜つ」と言いますが、丹治先生は私にとってそのような存在の一人かもしれません。先生は、大学全体、法学部、そして何より、関学全体の外国語教育に大きな足跡を残された一人です。従来からの全学的な研究誌『論攷』に加えて、この『外国語外国文化研究』が、『法と政治』と同じように、法学部予算から費用を支出するかたちで出されたのも、その発想と実行の中心の一人は丹治先生でした。今回、当の機関誌に追悼文を掲載する機会が与えられたことに謝意を表しつつ、先生の足跡を簡単にたどってみたいと思います（紙数オーバーについては寛大なお許しをいただきました）。

以前、栗林宗教主事の前の内田宗教主事の頃、チャペルトークを宗教主事だけでなく、一般の先生方にもしていた、ということルールができ、そのときの、丹治先生のすごみのある真剣なトークが私の記憶に鮮明に残っています。それは、お住まいの京都の疎水で、母親が子どもの身体に縄を結わえて、川に沈めた米を拾わせる光景を目撃した、まさに戦後の闇市の一コマから始まる話でしたが、このような風景が丹治先生の生きる原点の一つであったように思えます。

それは、裏返せば、一人の人間が、どのような環境にあっても、貪欲に精一杯生きていく姿への共感とつながっており、丹治先生が、ものごとに真摯に立ち向かい、単純なお仕着せのアカデミズムの世界を超えて、独自の真理探究の世界を極めようとする姿勢に通じています。それは、研究分野では、初期の研究課題であったポール・ヴァレリーの枠を超えた、文学はもとより、音楽・美術・言語などの広範囲に及び、さらにとどまることのない領域への探究とも付号しています。

その姿勢は、ベルリオーズ論や、ハイネ論などでも展開されていますが、この記念すべき『外国語外国文化研究』の創刊号に寄稿されている、画家ベルト・モリゾーの近代的な感性を論述した「ベルト・モリゾー感性と分析と」にも如実に表れています。ゴーガン像を探究した、『最後のゴーガンー（異国の）変貌』も大作といつて間違いなと思います。ゴーガン像を求めて、交通事情の悪い、カリブ海に浮かぶフランス領の小島・マルティニック島へ行かれた話もよく聞きましたが、「我々はどこから来たのか 我々は何者か 我々はどこへ行くのか」という、画家ゴーガンのみならず、ご自身の命題を探る旅でもあったであろうと憶測します。このような行動に裏打ちされた膨大な研究の足跡は、『外国語外国文化研究Ⅻ』の退職記念号の業績欄でも確認することができます。

そして、丹治先生のすこいところは、この研究姿勢が、教育や行政とも同時並行しており、実に様々な改革と結びついていることです。その根底には、研究領域の上下や軽重などの壁があらうはずがなく、教育の担当や処遇面でも、誰もが等しくあるべきだという主張に結びつきます。いわば、丹治先生の脳裏で、日常のあらゆるものが有機的な円環となつて、あるべき姿へと駆り立てられていたのだらうと思われまふ。

どの組織体でも、受け継がれてきた体制や機構は、旧態依然のまま続いている場合が多いわけですが、われわれの場合も、いわゆる専門領域と、外国語や教養科目等の担当には、特に、定年制と持ち駒（ノルマ）数に代表される歴然とした格差が長い間続いていました。これらの格差是正には、長い時間と、地道で間断のない主張が必要だったわけですが、その是正への歩みにはいつも丹治先生が存在がありました。その根底にあるのは、多文化的な広い視野に立脚した、外国語教育とは何か、また外国語教員とは何かという問いかけであり、その問いに対する答えと是正の手立てを導き出すには、学部の壁を超える必要がありました。

その長い時間の試行錯誤のなかで、まず外国語構想委員会の創設が提案され、外国語の全学構想が話し合われました。そこでは、縦割りの弊害の解消から、言語教育センターによる外国語の全学提供システムの構築などが議論され、

徐々に具体的な組織が形になっていきました。それには、丹治先生をはじめ、法学部の神崎昭伍先生、経済学部的小島達雄先生と久山秀貞先生、社会学部の紺田千登志先生、英語からは末席に小山も加わり、場所と時間の関係で、ほとんど夜に集まって話し合いました。

紙数の関係で多くを語れませんが、この後、この外国語構想委員会を基盤に、神崎昭伍先生が中心となり、学長の諮問機関として外国語教育委員会が創設され、本部棟の中に一室があてがわれました。そして、一九九〇年四月、外国語教育委員会の中に英語教育委員会が構成されます。

さらに、英語の関学を銘打った言語教育センターが一九九二年に発足し、安田雅美教授が中心となって英語インテンシブコースが開設され（十月、英語インテンシブプログラム開始）、安田氏が外国語教員の最初の副センター長に就任します（センター長は教務部長）。丹治先生も、一九九六年から二年間言語教育センター（一九九七年に言語教育研究センターと名称変更）の副長をされています。

このように、一段一段階段を上りながら、やっと全学の外国語教員が一所に集まって議論する場ができました。それまでは、全学の外国語教員が一堂に会する場合や機会がなかったわけですから、画期的なことであったと言えます。

また、この外国語教育委員会のもとで、外国語の全学提供システム構築の一環として、議論され実施された大きな変革は、採用人事のありようでした。従来外国語以外の「日本語」などの科目にも、全学的に見直す機運が生まれ、文学部以外の外国語教員の採用人事は、関学全体を視野に、必要に応じて言語教育センターに採用委員会を作り、公募人事にするという決定がなされたわけです。丹治先生をはじめ、多くの人は、文学部も加わるべきだという意見でしたが、現在は言語教育センター提供の科目だけが適用となっています。しかし、関学の外国語教育システムのうえでは、大きな改革であることには間違いありません。

次の大きなステップは、この言語教育研究センターが母体となり、神崎高明教授が中心になって、二〇〇一年に独

立大学院の創設につながっていきます。この独立大学院「言語コミュニケーション文化研究科」の、発足の経緯とその後歩みについては、二〇一二年発行の、神崎氏がまとめられた、『言語コミュニケーション文化研究科・十周年記念誌』の、「研究科十年史」に詳しく書かれています。そして、ここでも丹治先生が深く関わっておられることが読み取れます。三田の千刈セミナーハウスでの、泊まりがけの準備会でも、多くのことが議論されましたが、教育目標やカリキュラム編成などで英語に傾きかけると、やはり丹治先生の、多言語・多文化的な視点からの意見が出されて、方向性が是正され、その流れが現在に至っていることになりました。

丹治先生は、この大学院の言語文化コースで、「言語文化特論」と「記号論特論」などの科目を担当されておりましたが、ここでは、表現論と記号論を軸にした、広義のコミュニケーション論を講義していました。言語文化プログラムの中では、かなり特異で高度な内容だったと思いますが、惹きつけられている学生は少なくありませんでした。退職間際にご病氣になられ、休講を余儀なくされる事態となりましたが、非常に強い関心をもって受講していた学生の失望には強いものがありました。先に触れた近代的な感性を論述した、「ベルト・モリゾー―感性と分析と―」に表れていた表現論は、記号論とともに丹治先生のアカデミズムに一貫して流れており、それらが学生を惹きつけていたと思われます。

丹治先生が就職された一九六八年とは、世に知れた大学紛争の時期に当たるわけですが、その紛争から退職される二〇〇三年まで、先生の、なに臆することのない、胸をはった姿勢は一貫していました。私が就職した一九七四年は、法学部は特に学生の処分権の問題も孕んだ第二次紛争中で、私も翌年から米沢執行部に入って紛争処理に奔走しました。その時も外国語研究室の一員としてもいろいろ助けていただき、先生の、学生ときちんと渡り合える姿勢は相変わらずでした。それは、先ほど触れたコミュニケーション理論とも無縁ではないと思います。

その他いろいろ書きたいことがありますが、もう一つ記憶しておきたい大きな功績は、関学出版会の設立に尽力さ

れたことでしょう。最初に触れましたように、この『外国語外国文化研究』の創刊には、丹治先生の尽力が大きかったわけですが、その根底には、われわれは研究したことを文字化し、それを発表する自らの場が保証されるべきだという強い信念がありました。そしてその最たるものが大学独自の出版会を作るべきだという強い信念で、そのために多大な寄与をされ、現在出版会は、関学学術研究の重要な礎となっています。

丹治先生が関学に奉職された一九六八年から、今年で半世紀をこえ、独立大学院もやがて二十年を迎えることになるわけですが、この五十年の歩みを辿るにつけ、先生の足跡の大きさに驚くべきものがあります。考えてみれば、きちんとした展望のもと、物事に正面から向き合って、主張する側と相手との双方がぶつかり、そこで、プラスの相乗効果が生まれ、組織全体が一回りおおきくなっていると思いますが、丹治先生の関学三十五年間は、その相乗効果を高める長い年月だったと思います。外国語研究室も、その遺徳を偲びつつ、引き継ぐべきものは引き継いでいって欲しいと思います。

あらためて、フランスワインをこよなく愛された丹治先生に、心からの一献を捧げつつ、ご冥福をお祈り致します。